

<「知るっぱ！久留米」 令和3年9月9日(木) 12:30~放送分>

## 久留米入城400年(後編) ~第2回~ 「歴代の藩主から(2)」

<ゲスト：久留米市文化財保護課 白木 守>

坂本 MC (以下「坂本」)

「知るっぱ久留米」ナビゲーターの坂本豊信です。

今週も、『久留米入城400年』をテーマにお送りしていきます。ゲストはこの方です!

ゲスト:白木さん(以下「白木」)

こんにちは。久留米市文化財保護課の白木守です。よろしくお願いします。

坂本 9月は有馬藩の歴代藩主を取り上げています。

今日は7代の頼僮(よりゆき)からですね。よろしくお願いします。

白木 7代・頼僮は、父・則維(のりふさ)の隠居によって16歳で7代藩主となります。

頼僮は則維の実子なのですが、早々にお世継ぎに決まっていたんですね。

ところがその後、父・則維は別の女性との間にできた宅之進(たくのしん)という子どもを溺愛して、この宅之進を世継ぎにしようという動きが始まりました。

坂本 身内の争いみたいな、今だとワイドショーとか週刊誌が飛びつきそうな話が出てきましたね。

白木 則維は、宅之進を世継ぎにすることにかなり執着していたみたいですが、

結局は、家老・稻次因幡(いなつぐいなば)の進言などもあり、後継者問題は一旦落ち着きました。

ところが、その後に重税に苦しんだ農民の不満が爆発して大きな一揆が起こりました。

この一揆の阻止に尽力したのが、その稻次因幡でしたが、

則維はこのことを内心快く思っていなかったんですね。

だから、則維は一揆を理由に因幡を処分してよそに追いやるんですが、

周囲からの非難を避けられず、やむなく隠居しました。

それによって、頼僮が若くして藩主となったということなんですね。

坂本 なかなか激動ですよ。

そういった独裁的というか、無理な政治をすると、

どうしても庶民からの批判がでてしまうというのは、今も昔も同じなんじゃないかな。

白木 7代藩主となった頼僮ですが、55年という長い間、歴代藩主の中で一番長く藩主を務めています。

今の知事さんでも、これだけ長く務める人はいないですよ。

この時代には、久留米藩最大の一揆と言われる、農民10万人が決起した宝暦4年の一揆が起こります。

農民に対して厳しい処分を断行したのは、父の血を引いているんだろうなと思いますね。

坂本 ところで、頼僮(よりゆき)のことは、少しだけ知っているんですけど、和算・数学者としても有名な人ですよ。

白木 そうなんです。藩主の実績よりも、和算の研究者としての方が知られているくらいですね。最大の功績は「拾璣算法(しゅうきさんぼう)」という全5巻からなる和算書を刊行したことです。元々、和算というのは関流数学の秘伝とされていたのですが、今でいうところの代数や円の研究などを公開したことなんです。通常、和算はそれぞれの流派の中でのみ、密かに伝えられていましたが、これを公(おおやけ)にできたのは、大名としての権力と財力のなせる業といったところがあると思います。当時の日本の数学の最高峰で、西洋の数学よりも優れていたとも言われます。

坂本 学者で殿様、特に数学っていうのはユニークですよ。だんだんと学問的なジャンルに入ってきましたが、藩には藩校と呼ばれる学校がありますね。

白木 最初に天明3(1783)年、今の市役所があるあたりの両替町に学問所が開かれます。この学問所は、7代・頼僮が亡くなったことにより一旦は途絶えますが、これを再び興したのが、8代藩主であり、頼僮の長男である頼貴(よしかた)です。

坂本 志半ばで亡くなった父の思いを受け継いだということですね。

白木 頼貴が両替町に学問所を再興し、その後、火災に遭ったりして藩校は何度か中断します。しかし、最終的に寛政7(1795)年に江戸で儒学を学んでいた樺島石梁(かばしませきりょう)が帰藩したのをきっかけに藩校を再建し、翌8年に外郭内に明善堂を設置します。これが、現在の明善高校の前身となっていますね。

坂本 実は明善高校は私の母校なんですけど、その前身の学問所を含めると238年の歴史があります。

白木 伝統校ですね。ちなみに明善高校の校章は、有馬家の家紋のひとつである竜胆車(りんどうぐるま)がモチーフとなっています。頼貴の子どもは、跡継ぎも含めて若くして皆亡くなっています。本来の跡継ぎに頼端(よりのなお)という人がいて、この人が跡継ぎに決まっていたんです。ところが、この子が亡くなってしまい、その子ども、つまり頼貴の孫にあたる頼徳(よりのり)が16歳で9代藩主に就任しました。

坂本 みなさん若くして殿様になるんですね。  
頼徳といえばこれがまたユニークで、芸術の分野でもよく知られた人物だそうですね。

白木 むしろこちらの方がよく知られているみたいで、  
芸術だけでなく武芸や学問も大いに奨励したこともあり、文武両道のきっかけとなっていますし、  
藩内にも芸術を大事にするという風潮が広まり、  
後に多くの文化人を輩出するきっかけになったのではないかと思います。

坂本 久留米という土地は、芸能人や芸術家もたくさん出ていますね。  
そういう芸術発展、文化発展の基礎を築いた藩主…なのかもしれないですね。

白木 多芸多才で書画も多く残していますし、大きな庭園を造ったり、  
茶道界ではよく知られている「柳原焼(やなぎはらやき)」という焼物を焼いたりして、  
趣味に没頭した面もあります。  
「月船(げっせん)」という号で絵画や書をたしなんでいたようですね。

坂本 殿さまが趣味に興じると、政治がおろそかになったりとかしなかったんですか？

白木 そうなんです。実は、そういったこともあって、藩の財政を圧迫していくんですね。  
しかし、頼徳はそこを大いに反省して趣味の予算を大きく削減し、  
節約をして財政の立て直しに走るんです。  
その点は評価できますが、いかんせん時期が遅すぎて、  
この財政難は江戸時代が終わるまでずっと続くことになってしまいます。

坂本 江戸時代が終わり、その後の当主も有名な人が続々といますよね。

白木 代表的な人だけ紹介しますと、14代当主の頼寧(よりやす)は、教育にも非常に熱心で、  
昭和3年には久留米高校の前身となる久留米昭和高等女学校の設立にも関わっています。  
その後、東京に行き農林大臣も務め、昭和30年には中央競馬会の理事長にも就任しています。

坂本 そこで年末に行われる競馬の大レースの有馬記念が誕生するということですね。

白木 ファン投票で競走馬を選出するレースを企画したのが頼寧で、  
当初は中山グランプリという名前でしたが、翌年に頼寧が亡くなると、  
その功績を称えて「有馬記念」という名前になっています。  
また、頼寧の子の頼義(よりちか)は、昭和29年、36歳の時に  
「終身未決囚(しゅうしんみけつしゅう)」という短編小説で第31回直木賞を受賞しています。  
そして、頼義さんの跡を継いだのが、現在の16代当主の頼央(よりなか)さん。  
東京水天宮の宮司さんでもあります。

坂本 まだまだ隠れたネタがたくさんありそうですが・・・お時間となってしまいました。  
来週は、有馬家の菩提寺である梅林寺について、『梅林寺も 400 年』をテーマにお聞きします。  
みなさんお楽しみに!